

第47回IUPAC総会&第44回世界化学会議に 出席して



IUPAC総会及びコンGRES

IUPAC (国際純正・応用化学連合) は、2年に1度、総会 (General Assembly) と世界化学会議 (World Chemistry Congress) を開催している。今年第47回IUPAC総会 (2013年8月8日~15日) と第44回IUPAC世界化学会議 (2013年8月11日~16日) が、トルコ共和国イスタンブールにおいて開催された。

IUPAC総会では、専門分野の議題を取り扱うディビジョン・ミーティング、これからの化学のあるべき姿を議論するワールド・ケミストリー・リーダーシップ・ミーティング、化学産業や化学教育など特定のトピックスを取り扱う常設委員会、IUPACの決議機関である Council Meeting、世界の優れた女性研究者を表彰する第2回 Distinguished Women in Chemistry/Chemical Engineering の表彰式などが開催された。

世界化学会議では、野依良治・理研理事長をはじめとするノーベル化学賞受賞者らによる基調講演などが行われるとともに、約60カ国から約1,800人の化学者が集まり、各専門分野に分かれて研究発表及び研究討論が活発に行われた。



総会の会場となったミリタリーミュージアム



左から Rene IUPAC 事務局長, 巽和行会長, Mark Cesa 副会長, Nicole Moreau 前会長, John Corish 財務担当

竹内と所は、Young Observer として日本学術会議から派遣され、様々な会議に出席するとともに日本の代表团 (6名) の一員を務めた。

ディビジョン・ミーティング

8つの専門分野 (I: 物理・生物物理化学, II: 無機化学, III: 有機・生物分子化学, IV: 高分子, V: 分析化学, VI: 化学と環境, VII: 化学と健康, VIII: 化学命名法と構造標記) のディビジョン・ミーティングが行われ、竹内と所はそれぞれディビジョンVとIに出席した。

ディビジョンIでは、山内薫・東大教授がプレジデントを務め、約20名の参加者により議論が行われた。過去2年間の活動報告や、現在進行中のプロジェクト (グリーンブック要約版作成など) の進捗状況報告、新規プロジェクト提案、物理化学 Cartoon 学生コンペの結果報告、ディビジョン間の連携活動についての報告など、15の議題について審議が行われた。

ディビジョンVでは、M. Clara F. Magalhaes・Aveiro 大学教授がプレジデントを務め、参加者は約20名であった。終了または現在進行中のプロジェクト (17

件) の進捗状況など、過去2年間の活動内容が報告された。特に溶解性と平衡のデータに関する活動については多くの時間をあてて議論した。さらに、溶解したアルカリ臭化物の中の希土類金属 (Sc, Y, ランタニド) 臭化物の相互溶解性などの7件の新規プロジェクト提案やディビジョン間の連携活動についての報告など、16の議題について審議が行われた。

また、他のディビジョンとの合同ミーティングも開催され、合同プロジェクトにおけるディビジョン間の共通点・相違点に関する議論が行われるとともに、今後のディビジョン間の連携活動をさらに活性化させていくことを約束した。

ワールド・ケミストリー・リーダーシップ・ミーティング

ワールド・ケミストリー・リーダーシップ・ミーティングで審議すべき内容は4項目に分かれており、化学の将来 (The Future of Chemistry)、純粋及び応用研究のスコープ (The Scope of Pure and Applied Research)、IUPACの役割 (The Role of IUPAC)、キャリアの願望 (Your Career Aspirations) について3つのグループに分かれ、ミーティングが行われた (“化学の未来” は、すべてのグループでディスカッションした)。

純粋及び応用研究のスコープについてのグループディスカッションでは、ポーランド、イギリス、ロシア、アメリカ、ガーナ、ナイジェリア、モロッコ、ドイツ、日本など各国の代表が約20名集まり、全員参加型のディスカッションが行

われた。化学がグローバルな視点で貢献すべき事項として、食料問題、アフリカにおけるマラリアの問題、水資源環境問題、健康（医療）問題、資源の枯渇問題、エネルギー問題などが挙げられた。これら問題の解決のためには、効果的な環境浄化システムの構築、新型酵素の開発、新物質（触媒や機能材料等）の開発などを行い、優れた化学技術を速やかに役立てていきたいという意見でまとまった。アカデミックと産業界の協力についても議論が行われ、各国の共通事項として、アカデミックと産業界の間のギャップを埋めるべくコミュニケーションをとり共同開発を進めていくことが重要という点、また、双方の協力活動促進のためには政府からの科学研究費補助金が非常に有効だろうという点が挙げられた。

IUPAC 独自の役割についてのグループディスカッションでは、諸問題に対する意識を高める啓発活動、オピニオンリーダーとしての役割、リーダーシップを持って汚染問題をマネジメントすることなどが挙げられた。

最後に全体会議となり、各グループからの代表がディスカッションの成果を発表し、さらに、パネリストの方々による発表、続いて会場全体が参加する形式のディスカッションが行われた。全体会議では、化学は、物理・薬学・材料化学などの分野間の壁を超え、お互いに協力しながらグローバルに深刻な問題の解決にあたっていく必要があることが述べられた。



2013 Distinguished Women in Chemistry/ Chemical Engineering 表彰式（左から2番目が栗原先生）

Women in Chemistry Award 表彰式及び受賞講演会

“2013 Distinguished Women in Chemistry/ Chemical Engineering” の表彰式がガーデンパーティ形式で華やかに行われた。この賞は IUPAC が 2011 年に世界化学年を記念し、世界の優れた女性化学者を顕彰する賞として定めた賞である。第 2 回目となる今年は、栗原和枝東北大学教授をはじめ、11 名の世界の優れた女性研究者が表彰された。受賞講演会では、各国の女性研究者を取り巻く状況や、受賞者ご自身の研究歴についてなどのお話がなされた。特に栗原先生は、日本の女性研究者の状況について、また男女共同参画の取り組みの紹介などをお話された。

Council Meeting

総会の終盤の 8 月 14 日と 15 日に、加盟国の代表団出席のもと Council Meeting が開催され、重要事項の報告と承認や投票が行われた。概要は下記のとおり。

正式加盟国 (National Adhering

Organization) は今回 3 カ国の加入を承認して 61 カ国となった。また、企業から構成される IUPAC 賛助会員は 97 社（うち日本が約 30%）である。

新元素について、113、115、117、118 は、IUPAP と IUPAC の共同タスクチームで検討中と報告があった。

2014・2015 年の副会長は、ロシアの Natalia Tarasova に決定。なお、巽和行会長の任期は本年末で終了し、2014・2015 年の会長は、米国の Mark Cesa（現副会長）に決定済みである。2017 年は投票の結果、サンパウロ（ブラジル）が選出され、初の南米での開催となる。さらに 2019 年は、設立 100 周年記念として、第 1 回大会が開催されたパリ（フランス）に戻ることも承認された。

最後に役員選挙が行われ、山内薫東大教授（Division I の President）が選出された。次回は 2015 年 8 月 6 日～15 日に総会とコンGRESS が釜山（韓国）で開催されることになっている。



日本の代表団（6 名）及び巽和行 IUPAC 会長（上）。代表団は左から所裕子（筑波大）、栗原和枝（東北大）、川島信之（日本化学会常務理事）、山内薫（東大）、田中啓司（MC 緑化）、竹内孝江（奈良女子大）

〔竹内孝江（奈良女子大学）・所裕子（筑波大学）〕

© 2013 The Chemical Society of Japan